
大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 小林倫道気付
(Tell) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

目 次

大学図書館問題研究会京都支部についての私の初夢（松原修）	1頁
相互協力について思うこと（大館和郎）	3頁
支部委員任務分担決まる	4頁

大学図書館問題研究会京都支部についての私の初夢

立命館大学図書館 松原修
(京都支部事務局長)

新年明けましておめでとうございます。

わたしはこの度、大学図書館問題研究会京都支部の事務局長という大役を仰せつかりました、立命館大学図書館情報システム課の松原修と申します。まだまだ未熟者でございますので会員の皆様方にはご迷惑をおかけすることがあるかと思いますが、御指導、御鞭撻下さいますようお願い申し上げます。

さて、今日の図書館の情勢を概括いたしますと、国公私立を問わず図書予算についての伸びが全くなく（削減と言った方が正確かもしれないが・・・）、国立大学では第8次定員削減等や私立大学では「合理化」という題目のもとに業務の業者委嘱やそれに伴う定員削減が大幅に行われてきています。

また、図書館のあり方自体もたとえば慶応義塾大学藤沢湘南キャンパスに見られるような、印刷媒体の図書情報にとらわれないマルチメディア対応のものに変革されたり、国立大学を中心とした電子メディア・ライブラリーも実験検索されつつあります。

そして、学術情報センターでは1992年度からNAC S I S - I L Lのサービスを開始しさらには1993年度からはNAC S I S - I RからI L Lの申し込みを可能にするという、目録所在情報の提供から現物の申し込み、取り寄せまで一貫したサービスを実現する方向に向かっています。

このように図書館が高等教育の方向性や今日的な科学技術の発展段階のもとにおいて激動期を迎える中で、図書館員自体も激動期を迎えるわけでありまして、この様な情勢の中で我々図書館員が何をすべきなのかもう一度とらえ直すことがまさに重要となって来ているのではないのでしょうか。

しかし図書館員の使命、すなわち求める利用者に対して、求める資料を迅速かつ的確に提供するということは何ら変りあるものではありません。ただその情報を獲得し、提供する手段を初めとする方法論的なものが変化したのであり、それらにも対応でき得る力量が図書館員に求められて来つつあるのではないのでしょうか。

そこで今年度の第Ⅲ期大図研大学ではこれらの問題にスポットを当て、「図書館情報学」をメインテーマにすえ展開して行きたいと思えます。この分野は図書館員が最も(?)苦手とする分野でありましょうし、かつ最も今日的に必要とされる分野であります。まずこのアレルギーを取り除くことを第一目標といたしまして、各論を展開して行きたいと思えます。

私自身は、大図研はあくまである種の起爆剤であり、そこからもっと深く勉強したいという人が出てくれば大成功であり、それらの人が集まればゼミ形式の大図研大学となりましょうし、とりわけ第Ⅲ期はその様に行きたいと思っています。また講義形式の大図研大学は土、日の2日間にわたり、参加したいが条件が合わないという方も多数おられると思えますので、そのあたりのことも考慮して行きたいと思えます。

ところで昨年度は、京都支部20周年ということもありまして相互協力を活用していただくために「京都の大学図書館」を出版いたしました。これは毎日新聞にも掲載され、一般の研究者を始め、米国議会図書館からも購入依頼が来るほど大反響を呼びました。このことは、大学図書館の開放という意味において利用者ニーズと合致したからでありましょう。そこで今年度におきましても限られた予算の枠の中ではありますが、京都支部独自で利用者及び図書館員のニーズに添えるような研究発表的な出版ができればと思っています(たとえば各大学のデータベースの蓄積状況や外部データベースの導入状況など)。

また昨年度は総会を研究集会を中心とした形で開催したところ多数の参加者を得ることができました。このことは各会員の皆さんが自己研鑽したいという欲求が強く、それを大図研に求めている一つの現れであろうと思えます。したがって今年度はこれらの試みをより発展させ研究団体としての色彩を強めた活動を展開して行きたいと思えます。

ところでこれらのことを実現し成功させるためには、会員同志の顔の見えるネットワークが重要であり、班活動を重視しながらもそれを越えた活動のあり方も展開したいと思えます。

これまで初夢みたいな事を縷々述べて来ましたが、どれだけ実現するかは定かではありません。しかし、できるだけ会員の皆さんに見える活動ができるよう努力したいと思えますので、どうぞご指導、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

最後に、勝手なことばかり述べましたことを深くお詫び申し上げます。

相互協力について思うこと

京都学園大学図書館 大館和郎

試験やレポート提出締切日が近づくと、特定分野の本に貸し出しが集中し、貸し出し予約中の本が続出するわけだが、時間的に待っている余裕がない場合は、学生に紹介状を持たせて他大学図書館で閲覧させてもらうことがある。ある特定の書名のわかっている本を閲覧したい時は、先方へ所蔵確認を行なうが、ある主題の本が読みたいと言われると困ってしまう。だいたい前のことになるが、西洋中世のトイレ事情について書かれた本を探している学生がいた。適当な本がなく他大学図書館に行ってもらおうとしたが、せめてどういふ書名の本が読みたいのか、調べておかななくてはならない。書籍総目録の最新版やJ-B I S Cからトイレで始まる書名の本を拾いあげ、某大学図書館へ電話で所蔵確認を行ない、学生に紹介状を渡して行かせた。(NACSIS-CATが利用できない悲しさ!)しかしこの時点ではリストアップした本の中に西洋中世のトイレ事情について書かれた部分があるかどうか確認できない。徒労に終わる可能性もある。また、一方でたまたま書架で手にとった本が役立つというケースもありうる。

12月に京都・北陸六府県の私立大学図書館の相互協力に関する会議に出席した際、共通閲覧証について論議が集中した。他館を利用する頻度が多くなり、その都度紹介状を発行する従来のシステムをやめ、簡単な手続きで利用したいという要望のもとに提案されたのだが、特定資料のみでなく、特定分野の資料も閲覧できるよう利用範囲の枠を広げている(特定分野の閲覧については、事前連絡の必要なし)。この制度を採用すれば、始めにあげた例は処理しやすくなる。では受付館にとってはどうなのか。事前連絡なしの場合は求められた資料の所在を調べ用意しておく手間が省ける。しかし、問題もある。学生同志で閲覧証を貸し借りしてもわからない。あるいは落とした閲覧証を別人が拾って使うかもしれない。

以前予備校生が無断で図書を持ち出そうとして自動持ち出し防止装置に引っ掛かったことがあった。うちの図書館は資料の持ち出しはチェックできるが外部の人間の入退館はチェックできない。本人が黙っていれば閲覧は自由にできる。発行枚数を限定した貸出方式の共通閲覧証制度をとり入れた場合、これと似たようなことがおきるのではないか。依頼館で共通閲覧証を受け取った人間と受付館に現われた人間が同一人物かどうか確認できない。事故が起こった時の責任の所在とトラブル処理の手順をはっきり決めておく必要がある。

このような問題があるにせよ、うちのような図書館は相互協力でたよらざるをえない。GIVE AND TAKEの関係を常に胸にきざんでおかなければいけないのだが、実態としてはほとんどTAKEのほうにかたよってしまっている。文献複写依頼を出す時にどうしても処理の早い館を選んでしまう。そうすると一部の館に依頼が集中してしまう。そういう館の担当者の苦勞は今まで聞かされてきたので、最近はなるべく避けるようにしている。NACSIS-ILLシステムが稼働し始め処理日数が短縮されたとの報告がでているが、拠点校に依頼が集中する傾向は変わっていないようだ。

相互協力を資源の共有と言いかえることもあるが、その中で比較的遅れている分野が

分担保存・分担収集である。特に新聞・雑誌にその必要を感じる。わが図書館では、新聞原紙は最近3ヶ月間しか保存しておらず、それより前は縮刷版とマイクロフィルムの形態で保存している。内容的にはほとんど変わらないのだが、地方版の部分が抜けているので不便な思いをすることがある。ある学生がレポートを書くために、京都駅の建物の歴史を調べていたが、適当な文献が見つからず相談にきた。現在の駅舎は3代目だが、落成式の前後の日付の新聞に該当記事があると見当をつけた。しかしその当時の京都新聞の原紙はもちろん、縮刷版やマイクロフィルムも所蔵していない。そこで当時の新聞を所蔵している大学図書館の方をお願いしたところ、該当記事が見つかりコピーしていただいた。これは推測だが、当時の全国紙の京都版にも同様の記事があるのではないかと。雑誌に関しては、非学術的なもの（『学術雑誌総合目録』の対象とならないもの）の分担保存が望まれているようだ。某大学図書館では『週刊朝日』と『サンデー毎日』のバックナンバーを所蔵しているが、保存スペースの余裕がなくなっており、分担保存資料リストにあげてもらえれば助かると館員の方が言っておられた。国立大学図書館における外国雑誌の分担収集とはだいぶ性格が異なっている。わが図書館は非学術雑誌の大半は一年で廃棄処分し、ビジネス・法律系の商業誌や文芸誌・美術雑誌のみ保存している。しかし保存しているものの中にはダンボールに梱包されているものもある。利用頻度の低いものを選んであるのだが、それでもたまたま閲覧請求があると、倉庫（書庫ではない！）の中をほこりまみれになりながらダンボールの山をかきわけて探さすのである。こういうことがあるので利用頻度が低いからといって簡単に廃棄できない。

『学術雑誌総合目録』の古い版に出ていて新しい版で消えていた雑誌があった。所蔵館がデータを出さなかったのか、それとも廃棄したのかわからない。『学総』からもれてしまったものが気にかかる。たとえば外国銀行の調査月報は数えるほどしか載っていない。このように公の所蔵データからもれている資料を探さすには、勘あたりをつけたところに直接所蔵調査を依頼するか、私的なつながりを利用するかしかない。去年京都支部から発行された『京都の大学図書館』も当初は所蔵調査の有力なツールにとの意気込みで計画されたことを編集にたずさわった者として忘れることはできない。

..... < 新年度支部委員任務分担 >

【支部長】	篠原俊夫（京大医）	【支部報】	
【副支部長】	竹本文夫（同志社大人文研）	編 集	小林倫道（京都橋女子大）
【事務局】		”	大館和郎
事務局長	松原修（立命館）	印 刷	那須たみ子（京大理・地鉱）
” 次長	竹村心（京大教育）	発 送	西野真知子（京大教養）
” 次長	大館和郎（京都学園大）	【大図研大学】	
事務局員	小島沙織（京大教育）	学 長	竹村心
【財 政】	吉井紀子（京大薬）	事務局	松原修、小島沙織
【組 織】	大館和郎	【全国委員】	竹本文夫